駆け込み乗車はやめましょう

作＝かねたたき

しまった、寝過ごした！

関西出張というわけで、昨夜は羽目を外しすぎた。大阪のホテルに戻ってからつい眠りこけてしまった。今日は京都支社に９時に行かなければいけないのに、間に合うのだろうか。

とにかく俺は駅へ急いだ。ホームに駆け上がると、ちょうど列車のドアが閉まり始めたところだった。駅員が何か言っていたが、構わず俺はその列車に飛び乗った。

ほっと一息ついて車内に目をやると、何か変だ。他の乗客がみんな俺の方を見ている。何だ、一体。

俺が飛び乗ったドアの近くにいたＯＬ風の女性が、少し怒ったような口調で言った。

「ちょっと！　ここは女性専用車両ですよ！」

俺はびっくりして周囲を見回した。確かに乗客は女性ばかりだ。慌てて飛び乗ったので気がつかなかった。

「すみません。間違って乗ってしまいました。次の駅で車両を変わりますので……」

「本当に間違ったんですか？わざとじゃないんですか？」

「いえ、違います。遅刻しそうだったもので……」

「ほんまかどうか怪しいもんやな」

反対側のドアの所に座っていた高校生２人組が近づいてきた。
「女性専用車両に乗ってみたい変態やったりして」
「でもさあ、こんな格好してるけど、こいつ、ほんまは女かもしれへんで。確かめてみよか？」
「確かめるって、どないするん、エリカ？」
エリカと呼ばれたその高校生は、俺の目の前に立った。
「なあ、あんた、本当は女なんやろ？」
「いえ、私は男です…」
答えかけた途端、激痛が俺を襲った。その高校生はいきなり俺の股間を膝で蹴り上げたのだ。
俺は股間を押さえてうずくまった。脂汗がだらだらと流れてくる。
「あれ、本当に男やったみたいやなあ」
俺の股間を蹴り上げた高校生が、にやにやしながら言った。
「そやな。この痛がり方、男としか考えられへんな」
周囲の乗客たちも俺の方を見て笑っていやがる。でも俺はそれどころではない。下腹部全体を痛みが支配している。
「でもどうする？　男が女性専用車両に乗ったらあかんやろ」
「ほんなら女性専用車両に乗ってもええように、こいつ、男でなくしたらええんちゃうか」
「男でなくすって、どういう事？」

他の乗客が口を挟む。
「簡単なことや。こいつの金玉、ぶっ潰したったらええねん」
平然とした顔で高校生は答える。
「次の駅まであと１０分はあるから、蹴り潰すんには十分やろ」
「ちょ、ちょっと、やめてくれ」
そんなことをされてはたまらない。俺は苦痛の中、叫んだ。
「何言っとんや。女性専用車両に乗れるようにしたるんや。ありがたいと思い」
そう言うと２人の高校生は俺を両脇から抱え、無理矢理立たせた。
「さあ、みんなの中で、こいつの金玉、蹴り潰したい人、いる？」
「うん、やるやる」
「私にもやらせて」
「なんや、全員かいな。それじゃ、並んで。順番に蹴ってって」
「じゃあ、私からやるわね」大学生風の女性が俺の前に立った。
「あんたには恨みはないけど、こんなチャンス、滅多にないものね」そう言うと
俺の股間を足の甲で蹴り上げた。和らぎかけていた痛みが再び俺に襲いかかる。両脇を高校生が支えているので、うずくまることもできない。
「次は私ね」

最初に声をかけてきたＯＬ風の女性だ。
「あなた、うちの上司に似てるのよね。いつも私のことをいやらしい目で見てるのよ」
ドスッと重い蹴りが俺の股間に入る。とても耐えられる痛みではない。
その後も立て続けに十数名から蹴られ続け、激痛に気が狂うかと思われた。
「さて、潰れたかいな」
右側で俺を支えていた高校生が、俺のズボンとトランクスをおろした。
「まだ潰れてへんで。だいぶ腫れあがってるけどな」
そう言うとソフトボールぐらいの大きさになった俺の睾丸を指ではじいた。再びとてつもない激痛におそわれ、俺は大声を出した。
「うるさいなあ。黙っとき」
高校生は俺のネクタイをはずすと、口に巻き付け、声を出せないようにした。
「それじゃあ、仕上げといくか。私とエリカで１個ずつな。誰かこいつ、支えて」
高校生にかわって他の乗客が俺の両脇を支える。
「どないや、痛いか。タマ蹴られたらどうしようもないやろ。でもあと少しやから我慢し」
そう言うと渾身の力を込めて俺の股間を蹴り上げた。これまでとは格段に違う激痛に、俺は失神しそうになった。
「やったな、ほんまに１個潰れたで」

「残りの１個はエリカの分な」
「任せとき」
もう１人の高校生は俺の肩に両手を置き、俺の顔を見てニコッと笑った。
「男ってやっかいなもんやな。タマ蹴ったったらイチコロやもんな。あんたもこれまでにも何度か、男にしかわからん痛み、感じたことあるやろ。でも安心し。それも今日までやから」
そう言うと俺の肩に置いた手に力を入れ、俺の股間に膝蹴りを喰らわせた。どうしようもない苦痛。俺は泡を吹いた。
「さすがエリカ、狙いははずさへんな」
「金玉潰したったから、もう女性専用車両に乗ってもかまへんで」
列車は駅に到着し、俺のもたれていたドアが開いた。俺は股間を押さえたままホームに転がり落ちた。ホームにいた乗客と駅員が驚いた顔で俺の方を見ている。
「駅員さん、この人、女性専用車両に乗り込んで、私らの体に触ってきたんや。そやからちょっと懲らしめたったら怪我したみたい。病院に連れてったって。それから、男が女性専用車両に乗らんように、ちゃんとチェックしといてや」